

---

# 遊戯王GX～象徴を操る者～

エギル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX（象徴を操る者）

### 【Nコード】

N1609Y

### 【作者名】

エギル

### 【あらすじ】

デュエルアカデミアの試験に遅れて来た双子の兄妹、遊城十代と遊城刹那。彼らの物語が始まる…。不定期更新になりますが、よろしく願います。

## 第一話 双子と精霊

晴天の下、二人の少年少女が街中を全力疾走していた。

今日は、デュエルアカデミア入学試験の実技試験の日。当然ながら二人とも試験に間に合うように電車に乗ったのだが…

「遅れる遅れる遅れる！」

現在、すでに受付どころか試験の開始時間さえも過ぎていた。

「こんな日に電車が遅れるなんて！いやエキサイティング！これは俺達に与えられた試験なんだ！」

「十代、叫ぶ暇があるなら走ろうよ」

「なんだよ刹那！今だって走ってるだろ！ていうか、叫ばずにはいられねーだろ！」

少年、十代は叫びながら走っていると並走していた少女、刹那に注意されてしまい少し不機嫌そうな顔で刹那を見る。

【でも、急がないと不味いんだろう、十代。刹那の言うように走るのに専念した方がいいんじゃないかい？】

【……………】（コクッ）

二人が走っていると、十代の精霊のユベルと刹那の精霊、魔法の操マジカル・マリオネットり人形のオドが話しかけてきた。

オドは一言も話さないがこの場にいる者達は当然のように理解でき

るのでコミュニケーションには問題ない。

「！十代、前」

刹那を見ていて前方不注意になっている十代の前に人が立っていた。刹那の言葉で前を見た十代は止まろうとしたが、全力疾走していたのですぐに止まることはできなかった。

「うわっ！」

相手にぶつかってしまったが、十代が必死にブレーキをかけていたおかげで相手は倒れずに済み、十代は後ろに倒れ、カードが辺りに散らばった。

「すみません、大丈夫ですか？」

「ごめん」

二人はぶつかった相手に謝るが、どこかで見たような姿に思わず相手を凝視してしまう。ユベル達も驚いているようだ。

「君達、デュエルをやるのかい？」

ぶつかった相手が話しかけてくる。

「はい、これからデュエルアカデミアの受験に行くんです」

刹那が答えると、彼はデッキホルダーから一枚のカードを取り出した。

「ラッキーカードだ。こいつが君の所に行きたがっている」

彼はそのカードを十代に手渡した。

「えっ。ありがとうございます！」

「がんばれよ」

そう言うと、彼は歩いて行ってしまった。彼から渡されたカードはハネクリボーだった。

【クリクリー】

【へえ、良かったじゃないか十代。あの人に精霊のカードをもらえるなんて】

「十代、時間」

十代は驚きと感動で少しぼーっとしていたが刹那の言葉で我に返り、二人は試験会場に向かって再び走り出した。

## 第一話 双子と精霊（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。

**第二話 実技試験 VS 十代（前書き）**

第二話修正完了しました。

## 第二話 実技試験 VS 十代

十代 side

何とかぎりぎりですべて受付に滑り込んだ俺達が試験会場に入ると、一人の受験生が破壊輪で試験官のライフを0にした。

「スツゲエな、あいつ」

「当たり前だよ。受験番号1番、筆記試験のトップなんだから」

俺の言葉に、隣にいた気弱な雰囲気メガネの男子が答えた。受験番号ってそういう意味だったのかと感心していると隣にいた刹那にジト目で見られた。

【十代、それちゃんと試験要項に書いてたよ】

ユベルのため息を聞き流しているとすぐ近くにさっきの受験番号1番がやってきた。少し挨拶に行くか。

「さっきのデュエル凄かったな。今年の受験生じゃ、お前は2番目に強いかもな」

受験番号1番がどうして自分が1番じゃないのかと聞き返したから、俺は刹那の肩を組んで笑いながら答えた。

「1番は俺達だからさー!」

「十代、その考えだとこの人は3番だよ」



「細かいことはいいんだよ」

『受験番号11番、遊城十代君、デュエルステージへどうぞ』

刹那達と話をしていると放送で呼ばれた。

「おっ、行ってくるぜ」

「十代、頑張って」

【こんなところで負けるんじゃないよ】

【クリクリー】

【……………】（ぐっ）

「おっっ！」

皆の声援に応え、ステージに向かった。俺の相手は誰だ？

十代 side out

刹那 side

十代の相手は実技最高責任者らしい。さてと、ここから応援しますか。

「ねえ、さつきから気になってたんすけど。もしかして親戚なんすか？」

デュエルが始まるのを待っているとさつきのメガネ君が質問してきた。

「よくわかったね。いや、当然か。私達は双子だよ」

「やっぱりっすか。でも双子でも性格は全然違っんすね」

私達の見た目はそっくりで、周りの人に髪を伸ばすよう頼まれるほど見分けがつかない。現在はセミロングだ。本当は十代と同じ髪形にしたいのだが…。

そして、彼の言う通り私達の性格は表面上は真逆だが、ユベル曰く、私にも十代のようなところがあるらしい。よくは分からないが。

「君、彼は強いのか？」

受験番号1番が振り向いて聞いてきた。

「まあね、もうすぐ始まるみたいだ。見ていればわかるよ」

刹那 side out

十代 side

「この由緒正しきデュエルアカデミアの試験に遅れるなど言語道断！ドロッパアウトボーイ達はワタクシが相手をするノーネ」

「受験番号11番、遊城十代です。よろしくお願いします」

この特徴的な喋り方が俺の相手か……。どんなデュエルになるかわくわくしてきたぜ。

「デュエル！」

クロノスLP4000

十代LP4000

「ワタクシのターン、ドロ」

お、笑っているな。いいカードが来たみたいだ。どんなモンスターが来るんだ？

「ワタクシはカードを2枚伏せ、手札から《大嵐》を発動ナノーネ。フィールド上の魔法・罫を全て破壊するノーネ」

フィールド上に強風が吹き荒れ、カードを破壊した。先生のカードも巻き込まれてるぜ？何が来るんだ？

「ワタクシは破壊された《黄金の邪神像》の効果により《邪神トークン》を2体召カイン。そして《邪神トークン》を生け贄に《古代アンティの機械巨人》を召喚するノーネ」

古代の機械巨人 ATK3000

破壊された罫カードから金色のトークンが出てきたと思ったら、すぐに巨大な機械のモンスターが出現した。

「すげえ！すげえ！1ターン目から最上級モンスターを出すなんて、本当にすげえ！」

【さすが、実技最高責任者なだけはあるね。でも、あのモンスターは十代の敵じゃないね】

ユベルが俺の手札を覗き込み、笑いながら言った。確かにこれくらいの攻撃力なら対処できる。刹那が出すモンスターは時々化け物になるからなあ…

「褒めても何も出ないノーネ。ターンエンドなノーネ」

クロノスLP4000

手札：2枚

モンスター：古代の機械巨人

魔法、罠：なし

いけねっ、ちょっと集中が切れてた。今はこのデュエルを楽しもう！周りが何か言ってるけど気にしない。

「俺のターン、ドロー。俺は《E・HEROエアーマン》を召喚」

エアーマン ATK1800

「《エアーマン》の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、2つの効果を選んで発動する。俺は《デッキからHEROと名のつくモンスター1体を手札に加える》の効果を発動。俺は《E・HEROバーストレディ》を手札に加える」

これで切り札が揃った。

「俺は手札の《E・HEROフェザーマン》と《E・HEROバーストレディ》を融合！来い《E・HEROフレイム・ウィングマン》  
《！》」

フレイム・ウィングマン ATK2100

俺のフィールドに白い翼と竜の頭の腕を持ったHEROが現れた。

「いくらモンスターを並べても、《古代の機械巨人》には敵わないノーネ」

「まだまだ行くぜ！さらにフィールド魔法《摩天楼 スカイスクレーパー》を発動！」

フィールド上に高層ビル群がそびえ立ち、フレイム・ウィングマンが中央のビルの頂上に佇み、エアーマンはその近くを滞空している。そして手札に来てもらって悪いがハネクリボー、今回はお前の出番はなさそうだ。

【ク、クリイ〜】

【落ち込むんじゃないよ。君は僕と違ってそのまま場に出られるじゃないか】

…ユベル、目が笑ってないぞ。チャンスがあれば出してやるから。

「な、なんなノーネ!？」

「ここがHERO達の戦いの舞台だ！このカードは《E・HERO》  
《と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が  
相手モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃力が1000ポイント  
トアップする。《フレイム・ウィングマン》で《古代の機械巨人》  
を攻撃！スカイスクレーパーシユート！」

フレイム・ウィングマン ATK2100 3100

《フレイム・ウィングマン》が全身に炎を纏いながら《古代の機械  
巨人》攻撃して破壊した。

クロノスLP4000 3900

「マンマミーア！」

「そして《フレイム・ウィングマン》の効果発動。モンスターを戦  
闘で破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライ  
フに与える」

破壊された《古代の機械巨人》が倒れ、先生を下敷きにした。

クロノスLP3900 900

「《エアーマン》で直接攻撃だ！」

クロノスLP900 0

「ガツチャ。楽しいデュエルだったぜ、先生」

先生がものすごく悔しがっている。すると、同じデュエルステージ

で刹那の試験を行うと放送が入った。

次は刹那の番か。あいつが負けるとは思わないけど、応援するぜ！

十代 side out

## 第二話 実技試験 VS 十代（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。



### 第三話 実技試験 VS 刹那

刹那 side

『受験番号8番、遊城刹那さん、デュエルステージへどうぞ』

十代のデュエルが終わるとすぐに放送が入った。  
もう少し余韻に浸っていたかったのに…

「次は刹那の番だな、頑張れよ！」

「もちろん。負けるつもりはないよ」

ステージに向かう途中で十代とすれ違いざまに拳をにぎり、応援にこたえる。

ステージにつくと十代とデュエルした相手が再び構えていた。十代と同じ人が相手か。

「さっきのはまぐれなノーネ。ここで汚名返上させてもらおうノーネ」

十代に負けたことがショックだったらしい。だが、私も負けるわけにはいかない。

「デュエル!!」「デュエル」

刹那LP4000

クロノスLP4000

「先行はシニョーラに譲るノーネ」

「ではいきます。私のターン、ドロウ。私は魔法カード《スライム増殖炉》を発動。そして、カードを1枚伏せてターンエンド」

刹那LP4000

手札：4枚

モンスター：なし

魔法、罫：スライム増殖炉、1枚

何だあいつ、手札事故でも起こしたのか？

よりによってこんな時に。

あの子、運がないわね。

外野がうるさいが無視だ。私のモンスターは一気に化ける。

「フン、さっきのドロップアウトボーイと違ってシニョーラは運がないノーネ。ワタシのターン、ドロウ！」

先生はドロウしたカードを見るとニヤリと笑った。

「ワタシは《トロイホース》を召カーン」

トロイホースATK1600

「私は罫カード《威嚇する咆哮》を発動。このターン、相手は攻撃宣言することはできない」

「そんなことしても無駄なノーネ。手札からデュアルサモン《二重召喚》を発動。

このターンワタシはもう一度モンスターを召喚できるノーネ。さらに《トロイホース》の効果発動！地属性モンスターを召喚する時2

体分の生け贄にすることが出来るノーネ。ワタシは《トロイホース》を生け贄に《古代の機械巨人》を召カイン。カードを1枚伏せてターンエンドなノーネ」

古代の機械巨人 ATK3000

クロノスLP4000

手札：2枚

モンスター：古代の機械巨人

魔法、罫：1枚

周りの声が一段と大きくなった。まあ、知らない人から見ると絶望的に思えるだろうね。しかし、また1ターン目から《古代の機械巨人》を出すとは。

だけど、もう私の手札には勝利の条件はほとんど揃っている。残るは止めの一押しだけだ。思わず笑みがこぼれる。

「刹那！行けー！」

【これは決まりかな？】

【……】

【……クリ？】

余談だが、私の表情はほとんど変わらないらしく十代とユベル、オドにしか読み取れないそうだ。新入りのハネクリボーが混乱している。

「サレンダーするなら今のうちなノーネ」

「サレンダーはしませんよ。私のターン、ドロー」

…来た。

「《スライム増殖炉》の効果で《スライムトークン》を特殊召喚する」

スライムトークン ATK500

「私は《スライムトークン》に《下剋上の首飾り》《団結の力》《ジャンク・アタック》を装備。《団結の力》は自分フィールド上の表側表示モンスター1体につき装備モンスターの攻撃力・守備力を800ポイントアップする。そして、手札から魔法カード《テラ・フォーミング》を発動。デッキからフィールド魔法カードを1枚手札に加える。さらに、フィールド魔法《湿地草原》を発動。このカードはレベル2以下の水族かつ水属性モンスターの攻撃力を1200ポイントアップする」

スライムトークン ATK500 1300 2500

「いくら装備カードを重ねても、ワタシの《古代の機械巨人》には届かないノーネ（それに伏せカードは《ミラーフォース》なノーネ）」

「私は《サイクロン》を発動。先生の伏せカードを破壊します」

フィールドに風が吹き荒れ、先生のカードを破壊した。《ミラーフォース》だったか…

【……】（刹那、一言いいか？）

（…手短に頼むよ、オド）

【……】（そんな装備で大丈夫か）

（十分だと思うけど。それにもう私の手札は無いし何もできないよ）

質問に答えるとオドはフィールドの隅でいじけはじめた。何なんだ  
一体。

「…私は《スライムトークン》で《古代の機械巨人》を攻撃」

「攻撃力は《古代の機械巨人》方が上なノーネ。そんなトークンご  
とき、返り討ちにしてやるノーネ」

「《下剋上の首飾り》の効果発動。装備モンスターが戦闘を行う時、  
相手モンスターのレベル・自分のレベルの数値×500ポイント攻  
撃力をアップする。《古代の機械巨人》のレベルは8、《スライム  
トークン》のレベルは1、よって3500ポイントアップする」

スライムトークン    ATK2500    6000

「攻撃力6000でスート!？」

スライムトークンが古代の機械巨人に向かって飛んで行き、古代の  
機械巨人を貫き破壊した。

クロノスLP4000    1000

「ペペロンチーノ!？」

「さらに《ジャンク・アタック》の効果発動。装備モンスターが戦闘でモンスターを破壊した時、相手モンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える」

破壊された古代の機械巨人の破片が先生に降り注ぐ。なぜだろう、つい最近似たような光景を見たような気がする。

クロノスLP10000

「先生、ありがとうございました」

「ありえないノーネ!こんなことあるはずないノーネ!」

騒ぐ先生に一礼をし、フィールドを降りた。

ありえねえ!あいつ、トークン1体で勝ちやがった。  
2人揃って1ターンキルだと。何なんだよあいつら。  
フン、まぐれに決まっている。

周りの声を聞きながら十代達の所へ戻ると皆が迎えてくれた。

「やったな刹那!お前ならやれるって信じてたぜ!」

【まあ、当然だね】

【クリクリー】

【……………】(…あそこは違うだろ…)

「皆、ありがと。オドはいつまで落ち込んでるの。それじゃ私が最後みたいだし、帰ろうか」

さて、結果はどうなるかな？楽しみに待つとしよう。

刹那 side out

### 第三話 実技試験 VS 刹那（後書き）

《下剋上スライム》は500以上攻撃力を強化すると最強の攻撃力になるので便利でした。

なんでエクシーズはレベルがないんだよお…

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。



## 設定

遊城 刹那

性格：大人しめだが、十代の事になると熱くなる

好きな人、事、物：十代、ユベル、ハネクリボー、オド、鍛練、デユエル

嫌いな人、事、物：十代達を傷付ける人、十代をバカにする人、他人を見下す人

使用デッキ：元魔法使い族のトークンデッキ

備考：十代の双子の妹。十代とほぼ同じ外見。セミロング。普段はほぼ無表情で、十代とユベルとオドにしか読み取れない。十代がユベルのカードを持つまで、十代を泣かせた相手をリアルファイトで叩きのめしていた。幼少期はデユエルが弱く、十代に負けていたのが昏睡状態にはされなかったがユベルに目の敵にされていた。十代との和解のきっかけを作ったのでユベルとも和解し、親友となる。

オド

性格：負けず嫌いな性格

好きな人、事、物：明るい人、楽しいこと、ゲーム

嫌いな人、事、物：暗い人、つまらないこと

使用デッキ：ゴーレムデッキ

備考：マジカル・マリオンネット魔法の操り人形の刹那の精霊。一言も喋らないが刹那達は理解できる。本体は後ろの操っている方。実体化はできないが魔力を使って物を動かすことができる。

遊城 十代

性格：基本的に遊戯王GX初期の十代の性格

好きな人、事、物：刹那、ユベル、ハネクリボー、オド、デュエル

嫌いな人、事、物：カードを大切にしない人、仲間を大切にしない人

使用デッキ：エレメンタルヒーローE・HEROデッキ

備考：デュエルは刹那にメタカードで鍛えられた。睡眠学習が可能で授業は理解できている。試験中もたいていは寝ているが時々刹那に脅されてきちんと受ける。

ユベル

性格：ヤンデレではない

好きな人、事、物：十代、刹那、ハネクリボー、オド、十代達とのデュエル

嫌いな人、事、物：十代を傷付ける人、十代をバカにする人、

使用デッキ：イービルヒーローE・HEROデッキ

備考：十代の精霊。モンスターを実体化することができる。自身を実体化させて十代や刹那とたまにデュエルしている。基本的には十代の言うことを聞く。たまに刹那の体を借りて行動する。

## 設定（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。

## 第四話 真夜中のデュエル VS 万丈目（前書き）

カード効果はOCGのものです。

第四話修正完了しました。

## 第四話 真夜中のデュエル VS 万丈目

刹那 side

私達は2人とモデュエルアカデミアに合格し、今は校長先生の話も聞いている。少し離れた所に並んでいる赤い制服を着た十代は立っただまま寝ている。

所属は十代がオシリスレッドで私がオベリスクブルーだ。十代と同じクラスになりたかったが仕方がない。あ、終わったみたいだ。他の生徒の流れに乗って外に出て十代と合流すると、受験番号1番とメガネ君が先にいた。

「やあ、1番さん。その1番君にも言ったが俺は三沢大地。ライエローだ。よろしく」

「丸藤翔つす。オシリスレッドつす」

「遊城刹那。よろしく。十代は今から寮に行くんだよね。後で一緒に学園を見て回ろうよ」

「いいぜ。しかし刹那と俺の成績はそんなに変わらないのにクラスは違うんだな」

【：十代、女子は全員オベリスクブルーに入るって書いてたよ】

ユベルが額に手を当てつぶやく。ファイト、ユベル。

「まあね。それじゃ、また後で」

少しでも早く十代と行動するため、急いでオベリスクブルーの寮へと向かった。

\* \* \*

「…どこの城だよ、ここは」

目の前にそびえ立つ寮を見て思わずつぶやいた。これを見て寮だと分かる人はいないだろう。

【……】（エリートと女子のための優遇と言ったところか…）

しばし呆然としていたがオドの言葉で我に返り、自分の部屋へと向かった。

\* \* \*

荷物を整理し終え、十代と合流するために学園内を歩いている。

十代と待ち合わせはしていないが、双子のシンクロ率をなめるな。

「…右」

適当に進んでいくとデュエル場に出て、十代達を見つけた。何やらオベリスクブルーの男子と言いつ争っているらしい。

「十代、どういう状況？」

「刹那！いいところに来たな。俺とここでデュエルしようぜ」

「ここはオベリスクブルー専用のデュエルリングだと言っているだろ！オシリスレッドのドロップアウトは帰れ！」

「…なるほど、だいたい理解した」

ブルーの私が相手でもレッドの十代は使うなということか。しかし、このブルーの生徒は嫌いだな。他人を見下している感じで。何だかイライラしてきた。

「お前達、何を騒いでいる」

「ま、万丈目さん」

ブルーの生徒を睨みつけていると声がかかった。

「こいつらはまぐれとはいえクロノス先生に勝った連中じゃないか」

こいつ、十代のデュエルをまぐれと言ったな…。私の方は否定しないけど、許せないな。

「まぐれじゃないぜ。実力さ」

「その実力、見せてもらいたいものだな」

「いいぜ。デュエルだ！」



「あなた達、何をしているの！」

「て、天上院君」

十代達がデュエルディスクを構えると新たな声がかかった。

「そろそろ歓迎会が始まる時間よ」

「ちっ、行くぞお前達」

「「はい！」」

あいつは取り巻き共を引き連れて去って行った。

「あなた達、万丈目君の挑発に乗っちゃ駄目よ。あいつらろくでもない連中だから」

「分かった。忠告ありがとな」

「あなた達が遊城十代と遊城刹那ね。私は天上院明日香よ。明日香でいいわ」

「俺は十代でいいぜ」

「刹那でいいです」

「僕は丸藤翔つす」

「あなた達の寮でも歓迎会が始まるんじゃないかしら？」

「そうだったつす。アニキ、早く帰らないと始まっちゃっつす」

「そうだな。2人とも、また今度な」

十代達が帰っていった。もう少し一緒にいたかったのに…。

「私達も戻りましょう」

「…はい」

2人並んで歩いていると声をかけられた。

「それにしてもあなた、珍しいデッキを使うのね。トークンがエースのデッキなんて初めて見たわ」

「…エースはトークンじゃないです」

答えると少し驚かれた。まあ、オドは出なかったしね。

「そうなの。それと敬語はいいわよ。だけど、あんな勝ち方をしたからそう思ったわ」

「まあ、勝ち方の1つではあるけどね」

もっとも、他の勝ち方も似たようなものだけだ。

\*

\*

\*

ブルーの歓迎会は一言でいうと豪勢だった。寮の外見から予想はしていたが、やっぱり落ち着かない。

歓迎会が終わり部屋に戻ると、オドが荷物からゲームを引っ張り出して始めた。

以前、何故そんなにゲームが好きなのか聞くと「自分は人形使いだから。人形キャラクターを操ることで誰にも負けるわけにはいかない」と答えになるような、ならないようなことを言われた。

…一度格闘ゲームでこてんぱんにされたことが悔しかったらしい。

「オド、ほどほどにするんだよ」

【……】（了解）

\* \* \*

寝る準備をしているとPDAに十代からのメールが入った。

0時に昼間のデュエルリングであいつとデュエルするらしい。あいつは気に食わないけど、十代のデュエルは好きだから見に行こう。

十代は校則とか見てないだろうし、ガードマンの見張りもかねてね。

刹那 side out

十代 side

歓迎会が終わって部屋に戻るとPDAに万丈目からデュエルの呼び

出しのメールが入った。ベストカードを賭けたアンティルールだと断る理由なんかないし、あいつがどんなデュエルをするのか興味があるから行くぜ。  
刹那は俺のデュエルを見るのが好きだから、黙ってたら後が怖い。すぐに刹那にメールを送ることにした。

「アニキ、僕も行っていいっすか？」

「いいぜ。行こう」

\* \* \*

翔とデュエルリングに着くと万丈目達と刹那が先にいた。

「フン、逃げ出さなかったことだけは褒めてやる。アンティルールだ。負けた方がベストカードを渡してもらおう」

「十代、頑張つて」

「よっしゃー！行くぜ万丈目！」

「万丈目さんだ！」

「デュエル！」

十代LP4000

万丈目LP4000

「俺の先攻だ。ドロー！」

そういやこいつ、俺が先生に勝ったことを知っていたな。てことは俺が融合を使うことを知っているかもしれないな。対策はしておくか。

「俺は《E・HEROSパークマン》を召喚。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

スパークマン ATK1600

十代LP4000

手札：4枚

モンスター：スパークマン

魔法、罫：1枚

「俺のターンドロー。俺は「こんな時間に何をしているの！」て、天上院君」

万丈目がドローすると明日香が入ってきた。

「明日香、どうしてここにいるの？」

「あなたが寮を出るのを見かけたからよ」

「天上院君、今からこのレッドに学園の厳しさを教えてやるから、君はそこで見ていてたまえ。俺は《ヘルンジャー地獄戦士》を召喚。カードを3枚伏せてターンエンドだ」

地獄戦士 ATK1200

万丈目LP4000

手札：2枚

モンスター：地獄戦士

魔法、罨：3枚

「俺のターン、ドロ。俺は手札から《沼地の魔神王》を墓地へ捨て、デッキから《融合》を手札に加える。そして手札の《E・HEROフェザーマン》と《バーストレディ》を融合。来い！《フレイルム・ウイングマン》！」

フレイルム・ウイングマン ATK2100

「掛かったな！罨カード《ヘル・ポリマー》を発動！自分フィールド上のモンスター1体を墓地に送り、相手が召喚した融合モンスターのコントロールを得る。貴様の《フレイルム・ウイングマン》をもらうぞ」

《地獄戦士》がフィールドからいなくなり、《フレイルム・ウイングマン》が万丈目のフィールドに移る。  
モンスター奪取のカードか、だが！

「まだまだ行くぜ！俺は手札から《ミラクル・フュージョン》を発動！墓地の《フェザーマン》と《バーストレディ》を除外し、現れる！《E・HEROノヴァマスター》！」

俺の場にフレイルム・ウイングマンとは別の、紅い鎧とマントを纏った炎のHEROが現れた。

ノヴァマスター ATK2600

「2度目の融合だと!？」

「《ノヴァマスター》で《フレイム・ウィングマン》を攻撃!」

万丈目LP4000 3500

「くっ、罨カード《ヘル・ブラスト》を発動!自分フィールド上の表側表示モンスターが破壊され墓地へ送られた時、攻撃力が1番低いモンスターを破壊し、お互いにその攻撃力の半分のダメージを受ける。《スパークマン》を破壊し、800ポイントのダメージだ!」

万丈目LP3500 2700

十代LP4000 3200

「《ノヴァマスター》の効果発動。戦闘でモンスターを破壊した時カードを1枚ドロウする。ターンエンドだ」

十代LP3200

手札:2枚

モンスター:ノヴァマスター

魔法、罨:1枚

「俺のターン、ドロウ!俺は罨カード《リビングデッドの呼び声》を発動。《地獄戦士》を特殊召喚する。そして手札から速攻魔法《地獄の暴走召喚》を発動!攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚した時、同じモンスターを手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。相手は自分フィールド上に存在するモンスターを1体選択し、特殊召喚する」

「ノヴァマスターは融合モンスターだから、デッキには存在しない」  
「俺は《地獄戦士》を2体特殊召喚する。そして2体の《地獄戦士》を生け贄に、現れよ！《地獄の傀儡魔人》！」

地獄戦士 ATK1200

地獄の傀儡魔人 ATK2700

「《地獄の傀儡魔人》で《ノヴァマスター》を攻撃！」

「畏カード《異次元トンネル ミラーゲート》発動！《地獄の傀儡魔人》と《ノヴァマスター》を入れ替えてバトルし、エンドフェイズまでコントロールを得るぜ！」

「何だと！くっ」

万丈目LP2700 2600

「俺はターンエンドだ。だが《地獄の傀儡魔人》は俺のフィールドに戻る。貴様の場はがら空きだ！もう諦めた方がいいぞ」

万丈目LP2600

手札：1枚

モンスター：地獄戦士、地獄の傀儡魔人

魔法、罫：無し

「それはどうかな？俺のデッキには次のターンでお前を倒せるカードが眠っている。次のターン、そのカードを引いたら面白いと思わ



ないか？」

「馬鹿なことを言うな！そんな偶然あるわけないだろう！」

「俺はデッキを信じるぜ！俺のターン、ドロー！」

来た！

「ガードマンが来るわ！時間外の施設利用もアンティルールも校則違反よ！ばれたら退学になるかもしれないわ！」

へえ、そんな校則あったのか。ってか、何でこのタイミング！？

「何だと！くそっ、デュエルはここまでだ。お前ら行くぞ！」

「はい！」

「あつ。おい待てよ、デュエルはまだ終わってないぞ！」

「アニキ、早く逃げるっす！」

「…やだ！俺はここを動かない！」

【わがまま言うんじゃないよ、十代！】

【クリー！】

「十代、…来い」

十代 side out

明日香 side

十代がわがままを言って一時はどうなるかと思っただけど、刹那の一言で大人しくなったから助かったわ。

「どうだったかしら、オベリスクブルーの洗礼は？」

「大したことなかった」

「惜しかったね、十代」

「？危なかったように見えたけど」

「最後に引いたカードは何だったんすか？アニキ」

「へへっ、これさー！」

そう言って十代は最後に引いたカード、《パラレル・ワールド・フュージョン平行世界融合》を見せた。また融合カード…一体何枚入れているのかしら？

「こいつで《フェザーマン》と《バーストレディ》を融合して、相手の全てのモンスターの攻撃力を半分にする《Great TOR NADO》を召喚。手札から《ザ・ヒート》を召喚して攻撃してたら俺の勝ちだ！」

まさかあのタイミングでキーカードを引くなんて、面白い子ね。

「じゃあ翔、戻るか。2人ともまた明日な」

「はいっす。おやすみっす」

「おやすみ、十代、翔」

「おやすみなさい」

十代達が帰っていった、私達も戻りましょう。

明日香 side out

**第四話 真夜中のデュエル VS 万丈目（後書き）**

感想やアドバイスなどよろしく願います。

第五話 偽ラブレター事件 昼（前書き）

ほぼ回想回。

## 第五話 偽ラブレター事件 昼

翔side

デュエルアカデミアの入学から少したって、今授業を受けているんですけど…

「シニョール翔、フィールド魔法について説明するノーネ」

「えっと、フィールド魔法は、その…」

「分からないならもういいノーネ。これだからオシリスレッドはドロップアウトなノーネ」

落ち着けばちゃんと言えるはずなのに、やっぱり僕はダメだなあ。隣にいるアニキは食い入るように教科書を覗き込んでるし、僕とアニキじゃ姿勢が違うんすね。

「それデ〜ハ、同じ質問を次はドロップアウトボーイが答えるノーネ」

あ、アニキが当てられたっす。クロノス先生はアニキのことをドロップアウトボーイって呼んでるっす。でも、アニキは教科書を覗き込んだまま微動だにしない。そんなに集中してるのかな？

「アニキ、当てられたっすよ？」

声をかけると、アニキが読んでいた教科書がゆっくりと倒れ、教室

に音が響いた。

そしてアニキは…寝ていた。  
ブチッという音が聞こえたと思ったら

「ちゃんと授業を聞くノーネ！」

チヨークが飛んできた。

チヨークがアニキに当たるかと思ったら、どこからか消しゴムが飛んできてチヨークを撃ち落とした。

…つか、消しゴムってあんなに速く飛ぶものなんすか!?

あ、アニキが起きたみたいっす。

「ドロッパアウトボーイ、質問に答えるノーネ」

そんな、無理だよ。今まで寝ていたアニキが分かる訳ないじゃないか。

そう思っていたのにアニキはスラスラと流れるように答え、クロノス先生にストップをかけられるまで続いた。

…なんで質問が分かるんすか？

「あ、それと俺、オシリスレッドだけど試験で先生に勝っちゃったし?」

アニキの言葉にクロノス先生が悔しがり、笑いが起こる。

するとさっきと同じ方向から消しゴムがすごいスピードでアニキに向かって飛んできた。

アニキが前を向いたまま片手でそれをキャッチしたのは気のせいに

違くないっす！

翔side out

十代side

「刹那。なんで俺に消しゴム投げんだよ？」

「最後の一言は余計。言う必要はなかった」

皆と一緒に購買で買ったドローパンを食べている。俺はもちろん黄金の卵パンだ。入学してから当て続けているんだけど、この前オドに「お前はバグキャラか？」と言われた。言っではないが。

「でもアニキ寝てたんじゃないんすか？」

「ああ！でも授業は聞いているぜ」

「…器用なんすね」

「いろいろあつたんだよ…」

\*\*\*

「十代、これは何？」



俺の目の前には採点済みのテストが置かれていて、テストには赤で丸が書かれている。

ただし、解答欄ではなく右上に。2つではなく1つだ。

「十代、努力してこの点なら勉強を教えようと思うけど、なんで解答した跡すらないの？」

「寝てた」

刹那の纏う空気が変わった。

「だってよく、放課後のデュエルを全力でしたいから、そのための睡眠だぜ？」

「初めから寝たの？」

「…今回は名前は書いたぜ」

「ユベルも起こさなかったの？」

【愚問だね、刹那。十代の寝顔を見るのは最高の生きがいじゃないか】

「それもそうだね」

昔はユベルが刹那を邪険に扱っていたのに、今じゃ本当に仲がいいよな。

「でもこのままじゃ十代が馬鹿にされるかもしれないし、来年デュエルアカデミアに入れないかもしれないよ」

「大丈夫！実技で勝つから！」

【問題は十代が馬鹿にされるかもしれないということだよ】

「そうだよ。馬鹿にした奴が出たら、締め上げなくちゃ」

…2人とも少し過保護な所があるんだよな。これでも昔より随分ましになったんだけど、似た者同士だなあ。それと刹那、締め上げるな。

まあ、今では2人とも実行には移さなくなったし、冗談だってわかるけどな。

「む、そうだ十代。十代にぴったりの勉強法、思いついた」

何かを考えていた刹那が声を上げた。

「十代が間違えた問題の数だけ、私のデッキに十代のデッキのメタカードを入れて休憩中にデュエルする。デュエルも強くなるし、一石二鳥だよ」

よかった。たくさん間違えたらデュエル禁止とかじゃなくて。

「ヴァニティ・デビル《虚無魔人》で《フォレストマン》を攻撃」

「《ヒーローバリア》を発動！」

融合ができない…

今の状況は刹那の場に特殊召喚を封じる《虚無魔人》、俺の場に《フォレストマン》がいる。

デュエルはまず俺の先攻で《フォレストマン》を召喚し、1枚伏せてターンエンド。刹那のターンで特殊召喚した《THEトリッキー》を生け贄に《虚無魔人》を召喚。攻撃された《フォレストマン》を守ったところだ。

早くあのモンスターを何とかしなくちゃ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

よし！

「《フォレストマン》の効果発動！デッキから《融合》を1枚手札に加える。そして魔法カード《月の書》を発動！《虚無魔人》に裏守備表示になってもらうぜ！手札の《レディ・オブ・ファイア》と場の《フォレストマン》を融合！来い《ノヴァマスター》！」

「畏カード《融合失敗》を発動。《ノヴァマスター》を融合デッキに戻してもらおうよ」

「な！？待った！！」

「やだ」

その後のデュエルも《ヘル・ポリマー》で融合モンスターを奪われ

たり、《融合禁止エリア》で融合を封じられたり、《成功率0%》で融合モンスターを墓地に送られたりした。何とか勝っていたが…

でもさすがにきついから授業は聞くことにした。寝ながらだけどな

そして、筆記試験前日…

「十代、明日は最後まで寝ないでよ」

「おう！大丈夫だって」

だけど刹那は考え込んでしまった。前の模試は半分で寝たけど、解いた所はほとんどあっていたじゃねーか。

「そうだ十代、おまじないをしよう」

「おまじない？」

すると刹那は「十代のため、十代のため」とつぶやきながらリングを持ってきた。

「十代、プロレスには《アイアンクロー》って言って、握力で頭部を締める技があるんだよ」

「？それがどうしたんだ？」

グシャッ

砕けた、リンゴが、片手で、刹那が、

「明日の試験、頑張ろう」

\*\*\*

「あれはおまじないじゃねー!!」

「うわ!?いきなりどうしたんすか、アニキ」

「いや、悪い。何でもない」

「そうつすか」

余計なことまで思い出しちゃった。まあ、たしかに試験中眠くなる  
と砕け散るリンゴが脳裏に浮かんで眠気が飛んだけど、他に方法が  
あっただろ。

「アニキ、次の授業が始まるっすよ」

「もうそんな時間か。行くっせ」

次は体育か。ちょうどいい、体を動かして気分を変えよう!

十代 side out

**第五話 偽ライター事件 昼（後書き）**

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

## 第六話 偽ラブレター事件 VS 明日香

刹那 side

1日の授業が終わり、今は女子寮の風呂に入っている。

しかし、風呂も大きすぎる。ここまで大きくする必要はあるのか？

ん？近くにいた明日香達が十代の話をしている。

…十代とレッドのどこがダメなんだ。明日香じゃない2人。

前にレッド寮に行ったけど風情があっというところ、その時《デス・コアラ》によく似た、十代のルームメイトの隼人を紹介してもらった。

少し殺気を出していると明日香がこちらに気付いた。

「あら？刹那じゃない。こんなところで奇遇ね」

「あ、明日香さん。さっき突然寒くなっただんですけど」

「わ、私も。あら？あなた確か遊城十代の…」

「遊城刹那。よろしく」

殺気を抑えて話をしていると外が騒がしくなり、明日香達と一緒に様子を見に行くことになった。

\*\*\*

外に出ると翔が取り押さえられていた。

「何の騒ぎなの？」

「あ、明日香さん！こいつ覗きをしたんです！」

「だから覗いてないって！」

話を聞くと翔は明日香に呼び出されてここに来たらしいが、そのラブレターはミミズがのた打ち回ったような文字で書かれていたし、宛名は十代だった。

「明日香さん、こいつどうします？」

「学園に報告しましょうよ」

「そんな…」

「翔、あなたは十代の友達だから信じるよ」

「せ、刹那さん…！」

翔が希望に満ちた目で私を見つめる。

「だから安心して罰を受けなさい」

「え？庇ってくれるんじゃないんすか!？」



「ごめん。信じるけど、庇える証拠がない。でも、あなたが覗きをしてないって信じるから」

【……】（お前…たまに酷いぞ…）

寮長の鮎川先生が様子を見に来たが、明日香達の機転で翔を隠すことができた。

明日香が十代とデュエルしたいらしく、翔を使って十代を呼ぶことになった。

刹那 side out

十代 side

翔がさらわれたらしく、ボートで女子寮に向かっている。  
女子寮に着くと翔と明日香達と刹那がいた。

「刹那？翔が何をしたんだ？」

「こいつ覗きをしたのよ！」

「だから覗いてないって！」

【刹那、詳しく教えてくれるかい？】

「偽ラブレターにおびき出されたメガネがひとり」

「なるほど。昼間、翔の様子がおかしかったのはそういうことか」

「ただ、なんで俺を呼び出したんだ？」

「遊城十代、私とデュエルをしなさい。あなたが勝てば彼を返すわ。そのかわり、私が勝てばこのことを学園に報告するわよ。」

「そういうことか。」

「わかった。デュエルだ。」

翔をボートの後ろに乗せて湖の上に行く。

「そつえば明日香のデュエルって見たことないな。」

「「デュエル！」」

明日香LP4000

十代LP4000

「私の先攻、ドロー！私は《エトワール・サイバー》を召喚。カードを2枚伏せて、ターンエンド。」

エトワール・サイバー ATK1200

明日香LP4000

手札：3枚

モンスター：エトワール・サイバー

魔法、罫：2枚

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROワイルドマン》を召喚。」

「！」

ワイルドマン ATK1500

「《ワイルドマン》で《エトワール・サイバー》を攻撃！ワイルド・スラッシュ！《ワイルドマン》は罠の効果を受けないぜ！」

ワイルドマンが背負っていた大剣を構えてエトワール・サイバーに向かっていく。

「甘いわよ！永続罠《アストラルバリア》を発動！相手モンスターが自分フィールド上のモンスターを攻撃する場合、その攻撃を直接攻撃にする！モンスターを対象に取らないから《ワイルドマン》の効果は発動しないわ！」

ワイルドマンの攻撃がそれ、明日香に向かっていく。

「そして永続罠《スピリットバリア》発動！自分フィールド上にモンスターが存在する限り、私への戦闘ダメージを0にするわ！」

明日香に当たるかと思った攻撃はバリアに阻まれ、消滅した。

「明日香さんのバリアがきまりましたわ！」

「これであいつは明日香さんにダメージを与えられない！」

モンスターを攻撃することも、ダメージを与えることもできなくなつたか。でも！

「魔法カード《HERO`Sボンド》を発動！場に《HERO》と

名のついたモンスターが存在する時、手札からレベル4以下の《E・HERO》と名のつくモンスターを2体特殊召喚するぜ。俺は《アイスエッジ》と《レディ・オブ・ファイア》を特殊召喚！」

アイスエッジ ATK800

レディ・オブ・ファイア ATK1300

「カードを1枚伏せて、ターンエンド。そして《レディ・オブ・ファイア》の効果発動！自分のエンドフェイズに《E・HERO》と名のつくモンスターの数×200ポイント、つまり600ポイントのダメージを受けてもらう！効果ダメージだから《スピリットバリア》の効果は発動しないぜ！」

レディ・オブ・ファイアの周りに3つの火の玉が現れ、明日香を攻撃した。

明日香 LP4000 3400

十代 LP4000

手札：1枚

モンスター：ワイルドマン、アイスエッジ、レディ・オブ・ファイア  
魔法、罫：1枚

「私のターン、ドロー！私は《サイバー・チュチュ》を召喚するわ」

サイバー・チュチュ ATK1000

「そして場の《エトワール・サイバー》と手札の《ブレード・スケイター》を融合！現れよ、《サイバー・ブレイダー》！」

サイバー・ブレイダー ATK2100

「バトル！《サイバー・チュチュ》で《アイスエッジ》を攻撃！ヌーベル・ポアント！」

ここは通すか…

十代LP4000 3800

「そして《サイバー・ブレイダー》の効果発動！相手のモンスターが2体の場合、攻撃力は倍になる！」

サイバー・ブレイダー ATK2100 4200

「《サイバー・ブレイダー》で《レディ・オブ・ファイア》を攻撃！グリッサード・スラッシュ！」

サイバー・ブレイダーが回転しながらレディ・オブ・ファイアに近づく。

「畏カード《ドレインシールド》発動！攻撃を無効にし、その攻撃力分俺のライフを回復するぜ！」

レディ・オブ・ファイアと俺を包み込むようにバリアが現れ、サイバー・ブレイダーの攻撃を止めた。

十代LP3800 8000

…ライフが初期ライフの倍になったな。

「っ！私はターンエンドよ」

明日香LP3400

手札：1枚

モンスター：サイバー・チュチュ、サイバー・ブレイダー

魔法、罠：アストラルバリア、スピリットバリア

「俺のターン、ドロー！明日香、このデュエル俺の勝ちだぜ」

「まだ私のライフは3000以上あるのよ？」

「いくぜ！俺は魔法カード《R・ライトジャスティス》を発動！俺のフィールド上の《E・HERO》の数だけフィールド上の魔法、罠カードを破壊する！《アストラルバリア》と《スピリットバリア》を破壊するぜ！」

アストラルバリアとスピリットバリアが破壊された。

「明日香さんのバリアが！」

「やったっす！アニキ！」

「そして魔法カード《ミラクル・フュージョン》を発動！場の《ワイルドマン》と墓地の《アイスエッジ》を除外し、来い！《E・HEROガイア》！」

俺の場に漆黒の巨大な大地のHEROが現れた。

ガイア ATK2200

「《ガイア》の効果発動！このカードが融合召喚に成功した時、このターンのエンドフェイズまで相手モンスター1体の攻撃力を半分にし、その分《ガイア》の攻撃力を上げる。俺は《サイバー・ブレイダー》を選択するぜ！」

サイバー・ブレイダー ATK4200 2100

ガイア ATK2200 4300

「《ガイア》で《サイバー・チュチュ》を攻撃！コンチネンタルハンマー！」

ガイアが巨大な拳をサイバー・チュチュに振り下ろすと巨大な水柱ができ、水面を大きく揺らした。

明日香LP3400 100

「きゃー！！！」

「うわー！！！」

「ア〜レ〜！！！」

…なんか俺達以外の悲鳴が聞こえたような。ありえないよな、ここ湖の真ん中だし。

「ちよつと！！何するのよ！！！」

「アニキ！！！」

「わ、わりい」

俺だってこんな風になるなんて思わなかったんだよ!!

「くっ。けどこのターン、あなたはもう何もできないんじゃないの?」

「ああその通り、ターンエンドだ。だが忘れるなよ! 《レディ・オブ・ファイア》の効果発動! 俺の場には《E・HERO》が2体。400ポイントのダメージだ!」

レディ・オブ・ファイアが2つの火の玉を操り、明日香へと飛ばした。

明日香LP1000

「そんな...!」

「ガツチャ! 楽しいデュエルだったぜ!」

「やったね、十代」

俺達はいったん陸に戻るようになった。

「じゃあ、翔は返してもらおうぜ」

「ま、まぐれで勝ったからっていい気にならないでよね!」

「ジュンコ、負けは負けよ」



「アニキ」。助かったっす」

「十代、かつこよかったよ」

「へへっ。それじゃ、俺達は帰るぜ」

しかし、偽ラブレターを書いたのは誰だったんだ？  
まあいいか。おかげで明日香とデュエルできたし。  
もう遅いし、俺達は急いで寮に戻ることにした。

十代 side out

第六話 偽ライター事件 VS 明日香（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。

## 第七話 月一試験 VS 刹那（前書き）

今回は使いませんが、一部のカードをアニメ効果で使うことにしました。

## 第七話 月一試験 VS 刹那

刹那 side

今日は月に1度の試験の日。みんな必死に問題を解いているが、教室のどこにも十代がいない。

翔に聞こうかと思ったけど、翔が来てすぐに試験が始まった。

翔の様子を見るに病気とかではないようだ。

…寝てるのか？

試験終了10分前になってようやく十代が来た。

ひとしきり翔と騒いだ後、解答用紙を受け取ってすぐに眠りはじめた。

まあ、今からじゃこの問題数を解くのは無理だから仕方ないか。

\*\*\*

試験が終わると皆が急に走り出した。

「あれ？刹那、みんな急にどうしたんだ？」

本当に何も聞いていなかったようで、十代が疑問の声を上げる。

「アニキ知らないんですか？午後から購買で新パックが発売されるんですよ」

「本当か！？刹那、翔、俺達も見に行こうぜ！」

「うん」「はいっす！」

\*\*\*

スタートが出遅れたから少なくなっているとは思っていたけど、まさか買い占めた人がいたなんてね。

「あーあ。新パック、一目見たかったぜ」

「残念だったっすね、アニキ」

「ま、いつか。俺は俺のデッキを信じているからな」

「デッキの補強したかったのになあ…」

「…十代、1つだけ残っているよ」

「あ、本当だ！…翔、お前が買えよ」

「いいんすか！？アニキ！」

「いって、いって。それじゃ、デッキの調整に行こうぜ！」

「あ、ちよいとあんた」

十代と話をしていると、購買のおばちゃんが話しかけてきた。

「あ、今朝のおばちゃん。購買のおばちゃんだったのか」

「おばちゃんじゃなくてトメだよ。今朝はありがとね。お礼に受け取っておくれ、1つだけとつといたんだよ」

そう言つてトメさんはカードのパックを差し出す。

「これ新パックつすよ、アニキ！」

「やったー！ありがとつトメさん！」

本当に嬉しそうだね十代。いいカードも入っていたみたいだし、本当に良かった。

\*\*\*

午後からは実技試験でデュエルを行っている。次は私の番だ。

「頑張れよ刹那！」

「頑張ってくださいっす」

【頑張るんだよ】

【クリクリ〜】

「行ってくるよ」

皆の声援を受けてデュエルリングに上がると相手は先に待っていた。相手は明日香とよく一緒にいるももえだ。

「そういえば、あなたとデュエルするのは初めてですわね」

「そつだね。始めよう」

「デュエル！」「デュエル」

ももえLP4000

刹那LP4000

「私のターン、ドロー！私は《素早いモモンガ》を召喚しますわ！」

素早いモモンガ ATK1000

「そして永続魔法《黒蛇病》を発動！私のスタンバイフェイズ毎にお互いに200ポイントのダメージを受け、その次のターンからのダメージは倍になりますわ！カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ももえLP4000

手札：3枚

モンスター：素早いモモンガ

魔法、罠：黒蛇病、1枚

「私のターン、ドロー」

… 徐々に始めから闘えるね。一緒に闘おう。

「私は魔法カード《デビルズ・サンクチュアリ》を発動。《メタルデビル・トークン》を特殊召喚。《メタルデビル・トークン》を生け贄に、現れよ《魔法の操り人形<sup>マジカル・マリオンネット</sup>》」

私の場に幼い頃からの相棒、赤いマントを纏った仮面の操り人形師が現れた。

魔法の操り人形 ATK2000

【……】（刹那、パートナーを呼ぶときくらいは十代のようにテンションを上げたらどうだ？）

（出来ないことはないけど、生まれつきだから仕方ない）

【……】（そうか……）

オド、何を落ち込んでいるんだ？

刹那 side out

十代 side

「来たー！刹那のエース！」

オドは始めに出すほど効果を発揮するから幸先がいいぜ！

「あれが刹那さんのエースなんすか？何か…普通っす」



「そうね、エースはトークンじゃないとは聞いていたけど、関わり  
すらないなんて…」

いつの間にか明日香が来ていた。

「そんなこと言うなよ。あいつは刹那がトークンデッキを作る前か  
らのパートナーだからな。…というよりあいつを軸にトークンデッ  
キを作ったからな」

「えっ、どういうことなんすか？」

「まあ見てなつて」

\*\*\*

「私は永続罫《グラヴィティ・バインド 超重力の網》を発動し  
ますわ！フィールド上のレベル4以上のモンスターは攻撃できませ  
んわよ！」

「カードを3枚伏せて、ターンエンド」

刹那LP4000

手札：1枚

モンスター：魔法の操り人形

魔法、罫：3枚

「私のターン、ドロー！《黒蛇病》の効果でお互いに2000ポイン  
トのダメージですわ」

ももえLP4000 3800

刹那LP4000 3800

「私は《ラッコアラ》を召喚しますわ」

ラッコアラ ATK1200

「《ラッコアラ》の効果発動！自分フィールド上に他の獣族モンスターが存在する時、モンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップします。《素早いモモンガ》の攻撃力を上げますわ！」

素早いモモンガ ATK1000 2000

「《素早いモモンガ》で《魔法の操り人形》を攻撃ですわ！」

パワーアップしたモモンガがオドに特攻をしかける。

「デス・カリキュレーター《永続罫《死の演算盤》発動。フィールド上のモンスターが墓地に行くたび、プレイヤーは500ポイントのダメージを受ける」

「でも、それだとあなたもダメージを受けてしまいますわよ？」

このままではそうだ。だが、

「速攻魔法《スケープゴート》を発動。《羊トークン》を4体特殊召喚する」

羊トークン DEFO

「そして《魔法の操り人形》の効果発動。魔法カードが発動した時、魔力カウンターを1つ乗せる。そして《魔法の操り人形》は魔力カウンター1つにつき200ポイント攻撃力がアップする」

《スケープゴート》のカードから光の球が出てきてオドの近くに浮かんだ。

魔法の操り人形

魔力カウンター 0 1

ATK 2000 2200

「かまいませんわ！攻撃を続行しますわ！」

「そうはさせない。罠カード《はさみ撃ち》を発動。自分フィールド上のモンスター2体を破壊して、相手モンスター1体を破壊する。《羊トークン》2体を破壊して《素早いモモンガ》を破壊」

カラフルな4匹の羊のうちの2匹が、飛んでいるモモンガを両側から体当たりして破壊した。

\*\*\*

「いいぞー！刹那ー！」

「何言ってるんすかアニキ！《死の演算盤》の効果で刹那さん、1000ポイントのダメージっすよー！」

ももえLP3800 3300

刹那LP3800

「あれ？何でライフが減ってないんすか？」

「トークンの特性だな」

「あつ、お前…」

…

…三沢？」

「…何で疑問形なんだ？」

なんか…久しぶりに見たな…

「三沢君、どういことっすか？」

「ああ。トークンは通常モンスターとして扱われるが、破壊されたら消滅するんだ」

「消滅？」

「トークンはモンスターであってモンスターでないってことだ。墓地に行かないから《死の演算盤》の効果は発動しない」

つか、普段はほとんどトークンしか召喚しないから刹那に対して効果が発動することもないけどな。

\*\*\*

「戦闘破壊されなかったから《素早いモモンガ》の効果は発動しない」

「でも、私の攻撃はまだ終わってませんわ！《ラッコアラ》で《羊トークン》を攻撃ですわ！カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ももえLP3300

手札：2枚

モンスター：ラッコアラ

魔法、罨：黒蛇病、グラヴィティ・バインド、1枚

「私のターン、ドロ。魔法カード《闇の誘惑》を発動。2枚ドロして、手札の闇属性モンスター1体を除外。《魔法の操り人形》に魔力カウンターを1つ乗せる」

魔法の操り人形

魔力カウンター 1 2

ATK2200 2400

「…このターンで終わらせる」

いいカードが来たみたいだな。

「《魔法の操り人形》の効果発動。魔力カウンター2つを取り除くことで相手モンスター1体を破壊する。魔力カウンターを2つ取り除き《ラッコアラ》を破壊。《死の演算盤》の効果で500ポイントのダメージを与える」

オドの周りを漂う2つの光の球が1つに合わさると、さらに強い輝きを放ちながらモンスターに向かって飛んで行き、破壊した。

魔法の操り人形

魔力カウンター 2 0

ATK 2400 2000

ももえ LP 3300 2800

「魔法カード《大嵐》発動。フィールド上の魔法、罫を全て破壊する」

ももえが伏せていたのは《ミラーフォース》だったか。これで場はから空きになった。

魔法の操り人形

魔力カウンター 0 1

ATK 2000 2200

「魔法カード《アームズ・ホール》を発動。デッキの1番上のカードを墓地に送り、装備魔法カードをデッキから手札に加える。さら

に装備魔法《団結の力》を《魔法の操り人形》に装備。《団結の力》は自分フィールド上のモンスター1体につき、装備モンスターの攻撃力を800ポイントアップさせる。私の場にモンスターは2体よって1600ポイントアップする。魔法カードが発動されたことにより《魔法の操り人形》に魔力カウンターを合計2つ乗せる」

魔法の操り人形

魔力カウンター 1 3

ATK 2200 3800 4200

「攻撃力4200!?!」

「《魔法の操り人形》で直接攻撃」

オドが手を動かすと、両手に剣を持った人形がももえに向かって飛んで行き、斬りつけた。

「きゃー!」

ももえ LP 2800 0

刹那の勝ちだ!

「アニキ、もしかして刹那さんは魔法カードをたくさん使ったためにトークンデッキをつくったんすか?」

「最初はな。もっとも、あいつを出す前に決着がつくことが多いけど…。次は翔の番だぜ!頑張ってこいよ!」

「は、はいっす!頑張るっす!」

緊張してたみただけど翔も勝った。  
俺の番はいつだ？早く回ってきてほしいぜ！

十代 side out



## 第八話 月一試験 VS 十代

十代 side

「ドロッパアウトボーイ、デュエルリングに上がるノーネ」

やっと俺の番か、待ちわびたぜ！

皆の応援を聞きながら上がると、万丈目がいた。

「あれ？デュエルの相手は同じ寮の奴だろ？何で万丈目がいるんだ？」

「万丈目さんだ！」

「入学試験で好成绩を残したドロッパアウトボーイに敵うオシリスレッドはいないノーネ。特別にオベリスクブルーとデュエルしてもらうノーネ」

ふーん、つまり俺は認められてるってことだな！

万丈目とのデュエルも俺の勝ちだけど決着はついてないし、ラッキーだ。

「この新しいデッキで貴様を倒してやる！」

「いくぞ！万丈目！」

「万丈目さんだ！」

「デュエル！」

十代LP4000

万丈目LP4000

「俺の先攻、ドロー！俺は《E・HEROクレイマン》を守備表示で召喚！カードを1枚伏せてターンエンド」

クレイマン DEF2000

十代LP4000

手札：4枚

モンスター：クレイマン

魔法、罫：1枚

「俺のターン、ドロー！俺は《V・タイガー・ジェット》を召喚！そして永続魔法《前線基地》を発動！1ターンに1度、手札のレベル4以下のユニオンモンスターを1体特殊召喚できる。俺は《W・ウイング・カタパルト》を特殊召喚する」

V・タイガー・ジェット ATK1600

W・ウイング・カタパルト ATK1300

「《V・タイガー・ジェット》と《W・ウイング・カタパルト》を融合！来い《VW・タイガー・カタパルト》！」

VW・タイガー・カタパルト ATK2000

「《VW・タイガー・カタパルト》の効果発動！手札を1枚捨て、

相手フィールド上のモンスターの表示形式を変更する。《クレイマン》を攻撃表示に変更！」

クレイマン DEF2000 ATK800

「《VW・タイガー・カタパルト》で《クレイマン》を攻撃！」

「罨カード《ヒーローバリア》発動！自分フィールド上に《E・HERO》が存在する時、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

タイガー・カタパルトが放ったミサイルがバリアに阻まれ爆発した。

「ちつ。カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

万丈目LP4000

手札：1枚

モンスター：タイガー・カタパルト

魔法、罨：前線基地、1枚

「俺のターン、ドロー！《E・HEROクノスペ》を召喚！」

クノスペ ATK600

「そんな雑魚を召喚してどうするつもりだ？」

「俺の仲間を雑魚なんて言うな！《クノスペ》の効果発動！自分フィールド上に他の《E・HERO》と名のつくモンスターが存在する時、直接攻撃できる！そして《クノスペ》は相手に戦闘ダメージを与えるたびに攻撃力が100アップし、守備力が100ダウンす

る。行け！」

万丈目LP4000 3400

クノスペ ATK600 700

「魔法カード《ブルーメンブラット》発動！自分フィールド上の《クノスペ》を生け贄に捧げ、手札またはデッキから《E・HERO ブルーマ》を特殊召喚する！デッキから《ブルーマ》を守備表示で特殊召喚！」

ブルーマ DEF2000

「《クレイマン》を守備表示に変更。カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

十代LP4000

手札：1枚

モンスター：クレイマン、ブルーマ

魔法、罫：2枚

「調子に乗るな！俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《天よりの宝札》を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードをドローする。俺は手札から《X・ヘッド・キャノン》を召喚！そして《前線基地》効果により《Z・メタル・キャタピラ》を特殊召喚！さらに永續罫《リビングデッドの呼び声》発動！墓地から《Y・ドラゴン・ヘッド》を特殊召喚する！」

X・ヘッド・キャノン ATK1800

Z・メタル・キャタピラ ATK1500

Y・ドラゴン・ヘッド ATK1500

「《X・ヘッド・キャノン》と《Z・メタル・キャタピラ》、《Y・ドラゴン・ヘッド》を合体し、《XYZ・ドラゴン・キャノン》を召喚！」

XYZ・ドラゴン・キャノン ATK2800

「さらに《VW・タイガー・カタパルト》と《XYZ・ドラゴン・キャノン》を合体！現れる《VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン》！」

VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン ATK3000

「《VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン》の効果発動！1ターンに1度、相手フィールド上のカードを1枚ゲームから除外する。《ブルーメ》を除外する！」

ドラゴン・カタパルトキャノンの砲台から青いエネルギー波が発射され、ブルーメが破壊された。

「《ドラゴン・カタパルトキャノン》で《クレイマン》を攻撃！このモンスターが攻撃する時、攻撃対象モンスターの表示形式を変更する！《クレイマン》を攻撃表示に変更！行け！VWXYZ・アルティメット・ディストラクション！」

クレイマン DEF2000 ATK800

「畏カード《ヒーロー見参》発動！相手モンスターの攻撃宣言時に発動する！相手は俺の手札を1枚選択し、選択したカードがモンスターカードの場合、特殊召喚する！さあ選べ、万丈目！」

「万丈目さんだ！貴様、自分の手札が6枚もあることが分かっているのか？1番右のカードを選ぶ」

「当たり前だぜ！《ハネクリボー》を特殊召喚！」

ハネクリボー ATK300

「…その毛玉の効果は確か、破壊されたターンの戦闘ダメージを0にするものだったな。攻撃を続行する。《クレイマン》を破壊！ターンエンドだ」

十代LP4000 1800

万丈目LP3400

手札：4枚

モンスター：ドラゴン・カタパルトキャノン

魔法、罠：なし

悪いユベル、せっかく手札に残してたのに外しちゃった。

【十代のせいじゃないよ！あいつが悪いんだ！攻撃してきたらダメージを返してやったのに！】

まあ落ち着けて。万丈目が天よりの宝札を使ってくれたおかげで、ハネクリボーが似たことをできるようになったしな。ハネクリボーに託そうぜ？

【ハネクリボー！僕に分まで頼んだよ！】

【クリー！】

ハネクリボーがユベルに向かってビシッと勇ましく敬礼をきめている。

仲がいいのはいいことだ。

「おい！貴様のターンだ。さつさとドローしろ！それとも怖気づいたのか？サレンダーしてもいいのだぞ？」

「誰がサレンダーするかよ！俺のターン、ドロー！俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド」

十代LP1800

手札：4枚

モンスター：ハネクリボー

魔法、罫：3枚

「さつさと諦めたらどうだ？俺のターン、ドロー！《VWXYZ-ドラゴン・カタパルトキャノン》の効果発動！《ハネクリボー》を除外する！」

今だ！

「速攻魔法―《禁じられた聖杯》を発動！フィールド上のモンスター1体を選択し、エンドフェイズまでそのモンスターの攻撃力を400ポイントアップし、効果を無効化する！」

VWXYZ - ドラゴン・カタパルトキャノン ATK3000 3400

ドラゴン・カタパルトキャノンが放ったエネルギー波がハネクリボーに届くことなく消滅した。

「だが、攻撃はまだだ！《WXYZ - ドラゴン・カタパルトキャノン》でハネクリボーを攻撃！」

「速攻魔法《進化する翼》発動！自分フィールド上の《ハネクリボー》と手札2枚を墓地に送り、手札またはデッキから《ハネクリボーLV10》を特殊召喚する！」

ハネクリボーLV10 ATK300

「《ハネクリボーLV10》の効果発動！《ハネクリボーLV10》を生け贄に捧げることで、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力の合計分のダメージを相手ライフに与える！」

【やっちゃんえ！ハネクリボー！】

【クリクリー！！】

ハネクリボーが光り輝き、ドラゴン・カタパルトキャノンを破壊した。

万丈目LP3400 400

「くそっ！俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド」



万丈目LP400

手札：3枚

モンスター：なし

魔法、罨：2枚

「俺のターン、ドロー！」

「永続罨《リビングゲッドの呼び声》を発動！墓地の《WXYZ  
・ドラゴン・カタパルトキャノン》を特殊召喚する！」

VWXYZ - ドラゴン・カタパルトキャノン ATK3000

周りがドラゴン・カタパルトキャノンの復活に驚いている。俺もだ  
けど。

「でも、残念だな万丈目！勝たせてもらっぜ！」

「戯れ言を言っな！」

「行くぜ！俺は《E・HEROアイスエッジ》を召喚！そして魔法  
カード《R・ライトジャスティス》を発動！自分フィールド上の《  
E・HERO》と名のつくカードの分だけ、フィールド上の魔法、  
罨カードを破壊する！その伏せカードを破壊するぜ！」

アイスエッジ ATK800

これで万丈目の伏せカードはなくなった。

「《アイスエッジ》の効果発動！手札を1枚捨て、直接攻撃するこ

とができる！《アイスエッジ》で直接攻撃！」

「うわー！！」

万丈目LP4000

「この俺が、オシリスレッドに負けただと……」

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「見せてもらいましたよ遊城十代君。素晴らしいデュエルでした。よって勝者遊城君はライエローへ昇格です！」

校長先生が声をかけてきた。ライエローか……

「すみません、俺は辞退します。レッドのままでもいいです」

「どづいつことですか！？」

「そのままの意味です。俺はオシリスレッドを気に入っているんだ！離れる気なんてサラサラないぜ！……です」

「わ、分かりました。それでは試験を終了します」

皆の所に戻ると翔が泣きついてきて、その時近くの2カ所から嫉妬みたいなオーラを感じたけど気にしないことにした。

それと三沢が、俺がデュエルする前より元気になっていた。刹那が自分のことをしっかりと覚えていたことが嬉しかったらしい。さっきは悪かったな。

試験も終わったから、俺達は寮に帰った。

十代 side out

第八話 月一試験 VS 十代（後書き）

感想やアドバイスなどよろしく願います。

## 第九話 月一試験 後日

十代 side

月一試験から数日たった休みの日。今日も刹那がレッド寮に遊びに来ている、というより毎日だな。

今は俺の部屋にいるけど、翔と隼人は何か用事があるとかで珍しい。

で、今俺の目の前には白いマントが見える。いや、布は赤だけど。分かりやすく言うと、赤いマントが白く見える。  
…言っている俺もよく分からなくなってきた。

【……】（…はあ）

「なあ刹那、オドはどうしたんだ？」

「燃え尽き症候群」

「…ああ」

【じゃあオドが勝ったんだね】

【クリ？】

【そういえば、ハネクリボーは知らなかったね】

オドは実は、どちらかと言えば好きだけど特別ゲームが好きというわけじゃない。異常なほどのすごく負けず嫌いなだけだ。

一度負けると毎日でも勝つまで勝負を挑みに来ていた。ただ刹那が鬱陶しくなつて勝負は月に一度になり、それからオドは次の勝負に全力を注ぐようになった。

そして勝負に勝つと目標を失い、真っ白に燃え尽きる。

三年振りか、忘れてたぜ。

【……】（…全てがどうでもいい…）

「毎回思つけど、めんどくさい」

【ク、クリ〜】

ん？でもここまで酷かったっけ？

「そういうなよ。で、次は何にするんだ？」

「ネタ切れ。お金もないし、昨日すっかりゲーム機踏み潰して壊したし」

それか。

【……】（刹那は十代以外の扱いが雑だ…）

「……そうか。じゃあユベルの力を借りてデュエルディスクでデュエルしようぜ！久しぶりだろ？」

【……】（…デュエル？）

「ああ！そういえば前回、俺の負けだったじゃねえか、リベンジだ！ユベル、いいか？」

【十代の頼みなら、僕はかまわないよ】

【……】（…よし！デュエルだ！）

オドも元気になったみたいでよかった。

\*\*\*

「では、ジャツジ兼見張りを私、刹那とユベル、ハネクリボーがさせていただきます」

【十代、頑張るんだよ】

【クリクリ〜】

今俺達は森の中にいる。

一応オドの魔力の糸でセンサーを張っているけど、万が一くぐり抜けた人がいた場合に対処出来るようにしている。

「十代、頑張つて」

【……】（アウエーになるのはいつも通りだから分かっていたよ！）

「…オドも頑張つて」

【……】（何だ今の間は…）

刹那、あんまりからかってやるなよ。口元が少しつり上がっているぞ。

「オド、俺はいつでもいいぜ？」

【……】（ああ、少し待て）

オドが構えると、魔力でできた半透明のデュエルディスクが作られた。

【……】（よし、いくぞ！）

「（デュエル！）」

十代LP4000

オドLP4000

「俺の先攻、ドロ！俺は《E・HEROクレイマン》を守備表示で召喚！カードを1枚伏せて、ターンエンド」

クレイマン DEF2000

十代LP4000

手札：4枚

モンスター：クレイマン

魔法、罫：1枚

（私のターン、ドロ！十代の場に《トーチ・ゴーレム》を召喚し、



自分の場に《トーチトークン》2体を特殊召喚する)

トーチ・ゴーレム ATK3000

トーチトークン ATK0

(《トーチ・ゴーレム》を召喚したターン、通常召喚は出来ない。  
十代の場の《クレイマン》と《トーチ・ゴーレム》を生け贄に《溶  
岩魔人ラヴァ・ゴーレム》を十代の場に特殊召喚する！)

ラヴァ・ゴーレム ATK3000

(魔法カード《強制転移》を発動！お互いに自分フィールド上のモ  
ンスター1体を選択し、コントロールを入れ替える。《トーチト  
ークン》を選択！)

「俺の場には《ラヴァ・ゴーレム》しかない」

俺の場のラヴァ・ゴーレムと、オドの場のトーチトークンが入れ替  
わる。

これ以上好きにはさせない！

(《ラヴァ・ゴーレム》で《トーチトークン》を攻撃！ゴーレム・  
ボルケーノ！)

「させるかあ！カウンター罠《攻撃の無力化》発動！攻撃を無効に  
し、バトルフェイズを終了する」

ラヴァ・ゴーレムが放った火の玉が時空の穴に吸い込まれた。

(ちえつ。カードを2枚伏せてターンエンド)

オドLP4000

手札：1枚

モンスター：トーチトークン、ラヴァ・ゴーレム

魔法、罠：2枚

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《ヒーロー・マスク》を発動！デッキから《E・HEROワイルドマン》を墓地へ送り、《トーチトークン》をエンドフェイズまで同名カードとして扱う。魔法カード《ミラクル・フュージョン》発動！場の《ワイルドマン》として扱う《トーチトークン》と墓地の《E・HEROワイルドマン》を融合！来い《E・HEROガイア》！」

ガイア ATK2200

(やっぱり融合をしてきたか。勘だけどさっきのターン、融合できなかったんじゃないのか?)

「《ラヴァ・ゴーレム》がまだ出てないのに、迂闊に出すわけにいかないだろ！」

コストだから阻止できないし。

「《ガイア》の効果発動！このカードが融合召喚に成功した時、エンドフェイズまで相手モンスター1体の攻撃力を半分にし、その数値分攻撃力をアップする！《ラヴァ・ゴーレム》を選択！」

(罠カード《火霊術 「紅」》を発動！炎属性モンスターを生け贄に捧げて、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与える！

《ラヴァ・ゴーレム》を生け贄に捧げて十代に3000ポイントのダメージを与える！)

「うわー!!--」

十代LP4000 1000

今のは効いたぜ…。

【頑張れ！十代！】

【クリクリー!!】

「十代、頑張つて」

「…なあ。オドの応援もしてやれよ」

「優先度は十代の方が断然上」

【……】(…くれるぞ。…ダーク化するぞ)

「元々闇属性でしょ」

…全員冗談だつて分かつてるからいいか。

「《ガイア》で《トーチトークン》を攻撃!」

(罫カード《闇霊術 「欲」》を発動。闇属性モンスターを生け贄にして、2枚ドロウする。相手は手札の魔法カードを見せることでこの効果を無効にできる。《トーチトークン》を生け贄に捧げる)

「俺は無効にしないぜ」

【……】（ラッキィ 2枚ドロー！）

「ただどこれでオドの場はがら空きだ！《ガイア》でオドに直接攻撃！コンチネンタルハンマー！」

オドに向かってガイアが巨大な拳を振り下ろす。

オドLP4000 1800

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

十代LP1000

手札：2枚

モンスター：ガイア

魔法、罫：1枚

（行くぞ！私のターン、ドロー！モンスターをセット。カードを1枚伏せて、ターンエンド）

オドLP1800

手札：2枚

モンスター：1体

魔法、罫：1枚

「俺のターン、ドロー！」

オドの奴、モンスターをセットしてきたな。

オドのデッキのリバースモンスターは《ダミー・ゴーレム》だ。だ  
けどブラフの時もよくある。  
とりあえず残すのはまずいな。

「《ガイア》でセットモンスターを攻撃！」

セットモンスターは《番兵ゴーレム》だった。それより、あのカー  
ドは《ミラーフォース》とかじゃないのか？

（永続罫《リビングゲテッドの呼び声》発動！墓地の《トーチ・ゴー  
レム》を特殊召喚する！）

トーチ・ゴーレム ATK3000

やばっ！

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

十代LP1000

手札：2枚

モンスター：ガイア

魔法、罫：2枚

（私のターン、ドロー！《ミッド・ピース・ゴーレム》を召喚する  
！）

ミッド・ピース・ゴーレム ATK1600

（《トーチ・ゴーレム》で《ガイア》を攻撃！）

十代LP1000 200

「くっ！罨カード《ヒーロー・シグナル》発動！フィールド上のモンスターが破壊された時、手札またはデッキからレベル4以下の《E・HERO》と名のつくモンスターを特殊召喚する。デッキから《E・HEROフォレストマン》を召喚！」

フォレストマン DEF2000

(カードを1枚伏せて、ターンエンド)

オドLP1800

手札：1枚

モンスター：トーチ・ゴーレム、ミッド・ピース・ゴーレム  
魔法、罨：リビングゲッドの呼び声、1枚

次のターンで何とかしないとまずいな。

「俺のターン、ドロー！」

よし！

「《フォレストマン》の効果発動！スタンバイフェイズに《融合》を手札に加える。そして魔法カード《E・エマーゼンシーコール》発動！デッキから《E・HERO》と名のつくモンスターを1体手札に加えるぜ！」

これで決まりだ！

「手札の《バーストレディ》と《フェザーマン》を融合！来い《E・

HEROフレイム・ウィングマン』！」

フレイム・ウィングマン ATK2100

(…まさか)

「そのまさかだぜ！フィールド魔法《摩天楼 スカイスクレーパー  
》を発動！」

周りの森が高層ビル群に変わった。

「《フレイム・ウィングマン》で《トーチ・ゴーレム》を攻撃！《スカイスクレーパー》の効果発動！《E・HERO》と名のつくモンスターが攻撃をする時、攻撃力を1000ポイントアップする！  
行け！スカイスクレーパー・シユート！」

フレイム・ウィングマン ATK2100 3100

(罨カード《魔法の筒<sup>マジック・シリンダー</sup>》発動！攻撃モンスターの攻撃力分だけ相手にd「カウンター罨《神の宣告》発動！ライフを半分払って《魔法の筒》を無効にして破壊するぜ！」…は?)

オドが固まっている間に、フレイム・ウィングマンがトーチ・ゴーレムを破壊した。

十代LP200 100

オドLP1800 1700

フレイム・ウィングマンの効果を知っているから、オドが落ち込ん

でいる。

「《フレイム・ウィングマン》の効果発動！戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

フレイム・ウィングマンがオドに竜の右腕を向け、炎を浴びせた。

（ぐっっ！）

オドLP17000

「ガッチャー！楽しいデュエルだったぜ！」

【やったね、十代】

【クリ〜】

「おめでと〜っ」

【……】（負けた　　！！）

オドが叫んでいる。いつも通り声はないけどな。

【……】（十代！もう1度デュエルだ！負けっぱなしは性に合わない！次は絶対に勝つ！）

「おう、いいぜ！次も俺が勝つ！」

【十代、もうそろそろ翔達が帰ってくるんじゃないかい？】



「そついやそつだな、戻るか。オド！また今度デュエルしようぜ！」

【…………】（次こそ勝つ！）

やっぱりデュエルは楽しいぜ！しかし今回は危なかったな。

俺も次のオドとのデュエルに向けて強くなるぜ！

十代 side out

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1609y/>

---

遊戯王GX～象徴を操る者～

2011年12月18日03時53分発行